

中国のほんの話(85)

中国の大衆に愛され続ける紀曉嵐

蔭山達弥



日本のテレビドラマは初回から一話ずつ放送されるが、中国では大抵二話、多いときは三話続けて放送される。そして日本ではほぼ壊滅状態にある‘時代劇’（中国では‘古装戏’と呼ぶ）が人気を博している。人気のあるドラマは繰り返し放送され、今回で紹介する『鉄歯銅牙紀曉嵐』も初回放送から十年以上経った今でも、北京を初め、各地の放送局でゴールデンタイムや午前中に繰り返し放送されている。このドラマの時代背景は清の時代、乾隆帝と彼に仕える和珅（腐敗官僚）、紀曉嵐（清廉な学者）の丁々発止なやりとりが見る者を飽きさせない。乾隆帝を演じているのは張鉄林、和珅は王剛、紀曉嵐は張国立の中国では‘鉄三角’と呼ばれる最強の布陣、絶大な権力を持った乾隆帝の時代、宮廷のしきたりを知ることでも、歴史の勉強にもなる。

ドラマの中の紀曉嵐は長い煙管を持ち歩き、いつも煙草をぷかぷかやっているが、大変学問があり皆から一目置かれる存在。実在した紀曉嵐を彷彿とさせる。紀曉嵐（1724-1805）、本名は紀昀、清代中期の学者。1754年に進士に及第、1768年、彼の姻戚で地方官をつとめていた者の罪に連座し、ウルクチに流される。のち赦免され、四庫全書を作る事業が始まると総纂官に任命され、編纂の事業を統括した。四庫全書とは乾隆帝の勅命により、当時存在したあらゆる書籍を集め、重要なものについては校訂を加えた底本を作り、解題を附し、一定の分類法のもとに排列した叢書である。また、底本を作るほどの重要性はないが、ある程度の価値を持つと認められた書物には、解題のみが作成された。これらの解題を「四庫提要」という。故前野直彬氏によると、各書物の提要はそれぞれに専門の学者が執筆したのだが、紀昀はそれらに全部目を通し、甚だしいときにはほとんど全文を書き直してしまったそうである。（「訳者解説」平凡社ライブラリー 643『中国怪異譚 閱微草堂筆記 下』所収）

乾隆54（1789）年の夏、紀曉嵐66歳の時、四庫全書が一応完成し、その副本を作るため、離

宮のある瀋陽に出張して監督にあたったが、自分の仕事はほとんどなく、退屈をまぎらわすために、かつて見聞した珍しい話を書き綴り、「瀋陽消夏録」と題した。紀曉嵐は原稿を抄胥（祐筆のような職）に渡し、清書するように命じた。抄胥は清書を二部作って、一部を書店に売り、私腹を肥やしてしまった。書店は紀曉嵐先生の著述と銘打って、勝手に出版し、かなりの部数を売りさばいた。好評に気をよくした紀曉嵐は次々と、人間と幽霊と狐をめぐる怪異譚を発表していった。「瀋陽消夏録」に続いて「如是我聞」「槐西雜志」「姑妄聽之」「瀋陽統録」、そしてこの五つを合刊して『閱微草堂筆記』と名づけられた。閱微草堂とは都にあった紀曉嵐の書齋につけた名称である。

この間の十連休中、北京に帰った際、市内灯市口にある中国書店（古書肆）で『清代第一才子紀曉嵐全伝』（中国長春出版社、1993）を見つけ、30元（約540円）で購入した。テレビドラマの紀曉嵐はいつも乾隆帝から格別に目をかけてもらっているが、それは本当で、学問だけでなく、皇帝を笑わせるようなおもしろい話をたびたび聞かせていたことも記録に残されている。紀曉嵐と常に敵対関係にあった和珅について、この本では次のように書いている。「さて紀曉嵐と和珅は何ら行き来はなかったが、一緒に乾隆帝に仕え、いつも宮中で顔を合わせていた。紀曉嵐は和珅の事（悪事）については知らないふりをして、言上もしなかった。和珅を見かけると、謙虚に礼をして、傲慢にも卑屈にもならなかった。

和珅は紀曉嵐の才能をねたんでいたが、彼は本物の才能と学識があり、尊敬せざるを得なかった。」（同書241頁、拙訳）

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）